

南三陸にさく「はるかひまわり」

2011（平成23）年3月11日。ゆたかで美しい海に面した南三陸町歌津地区にも、大きな津波がおしよせ、あらゆるものをおし流し、いっしゅんにして多くの人命と人々の生活をうばいました。

ふっこうにはまだまだ時間がかかり、ひなん所での生活は津波で被害にあった人々の心に大きなかけを落とし始めていました。がれきがてっ去されたあと地は草木も生えていない、あれた野原になっていました。

牧野さんは、昔、歌津地区で町長をしていました。津波で大切な家族はゆくえ不明になり、そして変わり果てたふるさとのすがたに心をいためていました。

「何もかも流されてなくなってしまった……。」

牧野さんは、しんさいの後、大好きだった海を見ることができませんでした。

ある日、牧野さんは、

「新潟県中越地震のひさい地からゆずり受けたひまわりの種をまく場所はないだろうか。ふるさとが元にもどるには時間がかかる。だけど、このあれた風景のままなんてたえられない。」

と、知人の及川さんから相談を受けました。このひまわりの種は「はるかひまわり」とよばれていました。



1995（平成7）年1月17日の兵庫県南部地震により自たくがくずれ、神戸市の小学校6年生、加藤はるかさんがなくなりました。その半年後の夏、はるかさんの家があった空き地に無数のひまわりの花が、力強く、太陽に向かってさいていました。そのひまわりは、近所の人たちから、「はるかひまわり」とよばれるようになり、これまで新潟県など、さまざまなさい害のひさい地に種が送られ、花をさかせてきました。



「ふるさとを『はるかひまわり』でいっぱいになりたい。」

牧野さんは、さっそく自分の畑に種をまきました。地いきの人たちも種まきに加わりました。南三陸をひまわりでいっぱいになりたいという牧野さんの願いは、たくさんの人に伝わり、町じゅうにひまわりの種が配られました。ひなん所の人たちが小学校や中学校に種を配ったり、新聞配達をしている人が、一けん一けん種を配ったりしました。「はるかひまわり」の活動は、ひがいにあった人々の間につながりを生み、元気をあたえました。「南三陸町と気仙沼市を結ぶ約50kmの道路にそって花をさかせ、『ひまわりロード』をつくろう。」

牧野さんや及川さんは、となり街の気仙沼市の人々にもよびかけました。そのよびかけに、たくさんの人が集まり、ひまわりの種をていねいにまいていきました。



(写真提供 南三陸町観光協会)

夏になり、「はるかひまわり」は、^{みなみさんりく}南三陸町や^{けせんぬま}気仙沼市にたくさんの花をさかせました。

ひまわりは太陽に向かってまっすぐにせをのばし、前を向いてさいていました。そして、たくさんのひまわりたちが、まるでおどっているかのようにそよ風に心地よくなびていました。

ひまわりのそばでは、子どもたちが笑顔で遊び、地いきの人たちが楽しそうに話をしていました。

^{まきの}牧野さんは、やわらかいまなざしでひまわり畑を見つめました。ひまわり畑の向こうには、青い海がきらきらとかがやいていました。